



Title	インド近代史への視角(2) : ラーラー・ラージパット・ラーイの活動に寄せて
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 46, p. 13-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インド近代史への視角(2)

——ラーラー・ラージパット・ラーイの活動に寄せて——

桑 島 昭

A Study on Modern Indian History (II)

——with special reference to the thought and
activities of Lala Lajpat Rai——

Sho KUWAJIMA

The first three chapters of this study on Lala Lajpat Rai appeared in the Journal of Osaka University of Foreign Studies, No. 37, 1976.

The fourth chapter is mainly concerned with his activities in connection with national education, labour movement, problems of untouchability and the legislatures both in Punjab and in Delhi. Also I tried to throw light on 'nationalism' and 'communalism' in his thought.

I would like to express my grateful thanks to Prof. Shanti Swarup, Head of the Department of Political Science, and his staffs of the Panjab University, Chandigarh, for their kind advice and giving me every facility for my work while I was attached to the Department from September, 1977 to February, 1978.

My thanks are also due to the Librarian, Dwarkadas Library, Chandigarh, who was of great help in supplying me materials on Rai.

Last but not least, I am deeply indebted to Principal Chhabil Das, Punjab National College in my making ideas on the History of Punjab in 1920's, especially on Bhagat Singh and his comrades.

CONTENTS

4. 1920's in Indian History
 - (1) Gandhi and Rai in the Period of the First Civil Disobedience Movement
 - (2) Rai and his National Education Movement
 - (3) Rai's 'Constitutional' Activities and "Hindu-Muslim Problem"
5. Conclusions (to be continued)
 - (1) Nehru Report and 'Simon Go Back'
 - (2) From Rai to Bhagat Singh

第4章 インド史における1920年代

一 第一次非暴力抵抗運動

朝鮮における三・一独立運動と中国の五・四運動に狭まれた1919年4月、インドではいわゆるローラット・サティヤーグラハが展開される。第一次世界大戦期の弾圧立法、インド防衛法は3月にローラット法へと引継がれてイギリスにたいする戦争協力の代償として戦後に自治を期待した人々に衝撃を与え、ムスリムもまたイギリスの保証とは逆にトルコ帝国の敗北に伴うカリフ制の崩壊を憂慮して反英意識を強め、ガンディーの指導を受入れてキラファット運動をはじめていた。ガンディーがローラット法成立に抗議して呼びかけた4月6日のハルタルはパンジャブ各地で熱烈な呼応をみ、9日のガンディーのパンジャブ入りを禁止した措置とサティヤーグラハの指導者キチルーとサティヤールルの逮捕、追放はパンジャブの情勢を一気に激動に導く契機となった。

州都ラーホールでは、4月6日までの段階では都市中間層と学生が運動の荷い手であったが、9日以後参加層は急速に拡大する。ヒンドゥーの祝日、ラームナウミーにあたる9日、ヒンドゥーはムスリムにも祭への参加を呼びかけ、劇的な連帯の表明の場面が各所にくりひろげられ、デモには、商人、中間層、学生のほか手工業者や労働者も加わっている。翌10日には商店のハルタルが一せいに行われ、11日には情勢は支配者の手に負えなくなり、バードシャーヒー・モスクに集まった3万5千人のムスリムとヒンドゥーは行政当局と交渉し、かつ無政府状態下の市民の面倒をみる一種の「人民委員会」を選んで¹⁾、50名からなるこの委員会は民衆の不満を代弁する役割と政府と交渉する任務とのあいだの調整に苦しみつつ、14日、オドワイヤー州知事の圧力のまえに屈した。パンジャブにおける運動の流れは、必ずしもガンディーの示す方法にこだわらなかったが、このラーホールのサティヤーグラハに注目したインドの研究者ラビンドラ・クマールは、参加者は職業や階級よりも宗教やカーストへの所属意識が強く、オドワイヤーの「都市階級」圧迫策に反発した商工業者および都市中間層はアローラー、カトリー、バニヤーなどのカースト的結びつきを基礎として、また物価の騰貴と食糧の不足に苦しむムスリムの手工業者と労働者は貧しい層に喰いこんでいるザファル・アリー・カーンの『ザミーンダール』紙などを通じてカリフ制解体の危機を感じつつ、反英運動に投じたとしている。こうした状況のもとで、ガンディーは互いに矛盾する利害をおおう傘としての役割を果たしたという。氏はサティヤーグラハを「社会的ピラミッドの政治とロマンティシズムのイデオロギー」の結合として規定し、この点に運動の急速な成長と意外に早い崩壊の原因を求めている。しかし、この理解からは、「カースト」や「宗教」を回路として爆発した民族運動の巨大なエネルギー

1) Ravindra Kumar, The Advent of Mass Politics in India-The Rowlatt Satyagraha of 1919 in : B. R. Nanda and V. C. Joshi (ed.), Studies in Modern Indian History, Number One, New Delhi, 1972, pp. 1-18.

ギーが示した時代像はでてこない。氏がさぐりあてた大戦後の民族解放闘争のこの貴重な一章は、当時の民衆の意識、「人民委員会」の構成、委員会と民衆とのあいだの関係の究明を通じてさらに深められる必要がある。

パンジャブのもう一つの都市アムリットサルにおいても9日頃から情勢は急変する。ここでも、ラームナウミーの日にはヒンドゥーとムスリムが同じ器から飲料水を分ち合う光景がみられた。翌10日、2人のサティヤーグラハ指導者の釈放を要求する群衆は警官の発砲を機に銀行や公共建造物を襲い、数名のイギリス人を殺害した。これまで商人や穀物卸売業者がハルタールを行ない、手工業者や小規模工業者が市の集会やデモを構成していたが、この日の暴動には定職をもたぬ最底辺層の不満がふきだしている。²⁾ このような背景のなかで13日のアムリットサル虐殺事件はおきた。ジャーリヤンワラー広場に入ったダイヤー將軍とその指揮下の兵士達は、集会中の人々に警告もなく、出口に向けて散る人達にも容赦なく弾丸が尽きるまで発砲した。³⁾ 死者は政府の報告書によっても379名、犠牲者のなかにはヒンドゥーもムスリムもシクも含まれている。この虐殺とそれに続く戒厳令下の屈辱こそイギリスにたいする大戦後のインドの民族的抵抗の意志を決定づけたのである。未だ12才のシクの少年バガット・シンは虐殺の報を聞いてラーホールからアムリットサルにかけつけ、血のにじむ土を持ち帰って怒りを胸に焼付けた。しかしながら、同年12月の会議派アムリットサル大会は、州段階における部分的「自治」を認めたにすぎない1919年統治法、いわゆる「改革」を「不十分、不満足」ながら運用させることを決議し、民衆の意識とのあいだに大きなずれを見せていた。

1920年5月、この事件を政府の側から調査するために設けられたハンター委員会の報告が発表された。報告書はダイヤーの理性を超えた行動と誤った義務感とを指摘したが、教訓を与え広汎な効果を狙うために発砲したと証言するダイヤーの危機感の総体を否定しはしなかった。この報告書の発表とトルコ帝国の解体を定めたセーヴル条約の調印(8月)こそ会議派をついに非協力の方向へと進めたのである。

こうした情勢のなかでラーイは帰国した。インド不在の約6年間のあいだに彼はインドを国際的視野のなかで位置づける視点を身につけたが、アメリカで描いた政治への構想は1920年代のインド史のなかでどのように変貌したのであろうか。1919年8月、パンジャブ人にあてたメッセージのなかで、ラーイは富者に思い悩むことなく、中産階級、労働者、農民を組織化することと、ヒンドゥー・サバーやムスリム連盟のようなコミュナル組織を離れることを呼びかけ、最良の指導者ガンディーに従うよう求めていた。⁴⁾ これは、1920年2月に彼が帰国したときに見出したものが大衆の政治的覚醒とヒンドゥーとムスリムの統一であったという発言に連

2) Kamlesh Mohan, Rowlatt Act Agitation in Amritsar in: Punjab History Conference, Tenth Session, February 28-29, 1976, Proceedings, Patiala, pp. 206-223.

3) Rupert Furneaux, Massacre at Amritsar, London, 1963, pp. 17-24 and pp. 121-127.

4) Lala Lajpat Rai, India's Will to Freedom-Writings and Speeches on the Present Situation(以下Vとする), Madras, 1921, pp. 59-60.

なっている。民族の指導者としてのガンディーの承認、大衆の組織化、コミュニズム批判、この三つが帰国時のラーイの立脚点であったといえよう。

当初、ラーイは「自治」に必須と考える国防と財政の権限がインド人に与えられていない「改革」の運用に参加する構えであったが、彼もまた、ハンター委員会報告後、パンジャープの戒厳令下の事態に責任ある高官達と議場を共にすることを望まず、議会ボイコットに傾いた。1920年8月1日、ラーイも加わる全インド・キラーファト会議は、会議派に先がけてガンディーの提唱する非協力のプログラムの実施に踏切った。

だが、議会ボイコットをこえるプログラムについてラーイはガンディーと意見を異にした。ラーイは政治を原則性と便宜性の結合としてとらえたが、⁵⁾ 現実の事態は両者の計算された調和を容易にゆるさなくしていたといえる。1920年9月、会議派のカルカッタ大会の議長をつとめたラーイは、ガンディーの提案した非協力のプログラムについて国を二分する問題では議長は中立を守るのが適当であるとして意見の表明を差控えた。⁶⁾ 決議は1855票対873票で採択されたが、ラーイの議長演説が巨大な流れに抗する印象を与えたことは覆うべくもない。ラーイがもっとも反対したのは官立学校ボイコットであり、決議文の「漸次のボイコット」も当面はボイコットしないと解釈可能であるとした。⁷⁾ のちに、ラーイは、カルカッタ決議に反対したのは、幼ない児童の退学は規律を失わせ悪影響のあること、医・工系の学生の退学は望ましくなく、アピールは情緒にではなく理性に呼びかけるべきであることのためであると説明した。⁸⁾ このような態度の底には、真理・知識の普遍性への信頼、政治への「現実的」接近、政治的運動の拡散化への懸念とがあった。欧米における生活体験に裏打ちされたラーイのこうした考えが、ガンディーの発想を受入れにくくしていたのである。法学部の学生にはボイコットの、学芸学部の学生には義務の呼びかけを感じずならばボイコットの、医・工学部の学生には大学残留を求める、⁹⁾ 一見「現実的」観点からうまれた難解な「学部別」ボイコットの訴えは、ひろく民衆をとらえるものとはならず、パンジャープにおける民族教育運動の展開にブレーキとなる一面をもっていたことも否定しがたい。この点では「近代文明」そのものを批判の対象にすえたガンディーの訴えははるかにインドの民衆の心に入ったといえる。

「あらゆる平和的かつ正当な手段で」スワラージを達成することを明記し、会議派の大衆組織化のための機構改革を行ない、「ガンディーの時代」の始まりを告げたといわれる1920年12月の会議派ナグプル大会において、ラーイは疑問点が取除かれたとして非協力決議を支持した。たしかに、修正された決議においては、16才以下の生徒の学校ボイコットは親の判断に委

5) *The Tribune*, April 30, 1920.

6) V. C. Joshi (ed.), *Lala Lajpat Rai-Writings and Speeches*, Vol. 2, 1920-28 (以下 VI とする), Delhi, 1966, pp. 47-48.

7) *The Tribune*, Sep. 24, 1920.

8) *Ibid.*, Jan. 28, 1921.

9) VI, pp. 83-84.

ねられ、それ以上の学生は良心に従うことが条件とされている。しかし、ラーイの基本的政治理念は変らなかったとみるべきであろう。

このことは、インドの労働運動におけるラーイの役割をみる際にも注意する必要がある。この年11月、ラーイはボンベイで開かれた全インド労働組合会議（AITUC）の創立大会において議長をつとめた。この組織の準備過程には8月にこの世を去る前のティラクが積極的に加わり、大会の歓迎委員会副議長の席に就く予定であった。¹⁰⁾「過激派」＝復古主義者論にたいする現実の歴史の解答であるといえよう。

創立大会には、会議派の指導者のほか、大戦期から大戦直後にかけて急成長した一部の資本家も加わった。ラーイも、インドの工業化のためには労働者が資本家と対等の立場で連携しなければならないという考えを打出している。AITUCは、共同の敵イギリスをまえにして両者のあいだの利益の対立を調整する場として期待されていたのである。¹¹⁾しかし、すでにアフメダーバードの労働運動を指導していたガンディーはこの全国組織にかかわることを拒否した。¹²⁾ガンディーは「近代文明」批判の荷い手を農民には求めても、労働者階級については彼の指導を離れた階級組織化を危惧したのである。

他方、大会宣言は労働者の運動が民族解放運動の一環であることを謳い、¹³⁾ラーイもインドの労働者階級がここに会合する歴史的意義を強調し、投票を通じて政治参加をめざすヨーロッパの労働者、その頂点にあってプロレタリアート独裁をめざすロシアの労働者について言及するなど第一次世界大戦後の歴史的転換を強く意識していた。¹⁴⁾同時に、ラーイは、労働者の要求に対応し、その組織化を助け、自立を促進するものであるならば政府のあらゆる努力を歓迎し、その限りでは政府にたいする態度は「支持でも反対でもない」¹⁵⁾とした。植民地支配者の労働政策にインドの労働者階級の運動を対置するところから出発するという「原則」的視点をラーイはとってはいない。

この全国組織成立の背景にはもちろん戦後における労働者のストライキの増大があり、ラーイの活動の中心地ラーホールからも鉄道・郵便・出版などの労働組合がこれに加入するか支持を寄せていた。¹⁶⁾しかし、ラーイの任務は、ヨーロッパのように投票の権利すら得ていないインドの労働者を「組織し、煽動し、教育する」ことにあった。この点で、ティラクやラーイがロシア革命の衝撃を受けとめつつもイギリスの労働組合運動に影響されていたことを指摘できよう。ティラクはイギリスの労働党や労働組合会議の活動を見て帰ったところであり、ラーイ

10) S. A. Dange, *Origins of Trade Union Movement in India*, New Delhi, 1973, p. 15.

11) *Ibid.*, p. 64.

12) *Ibid.*, p. 75.

13) Sukomal Sen, *Working Class of India-History of Emergence and Movement, 1830-1970*, Calcutta, 1977, pp. 178-179.

14) VI, p. 63.

15) *Ibid.*, p. 65.

16) Sen, *op. cit.*, pp. 179-182.

は労働組合運動のなかに社会主義の理念を鼓吹した¹⁷⁾といわれるケア・ハーディーの思想に共鳴し、¹⁸⁾ 1924年11月にはみずから独立労働党のメンバーとなり、インドにも労働党を結成する気持を抱いていた。実際、イギリスの労働党からの代表が AITUC の創立大会に来賓として出席している。

1921年7月、ラーイは健康を理由に ILO の会議に労働者代表として出かけることを辞退し、ラーホールが組織の本拠地ボンベイに遠いという理由で AITUC の議長も辞任した。のちにこの辞任の背景を回顧し、インドの資本家が外部の資本に脅されているときには彼等の利益を無視できず、非協力の原則とプログラムは労働者の利益に合致しなかったとのべている。¹⁹⁾ 彼の脳裏においては、労働立法を通じての労働者の権利の獲得と、議会ボイコットをふくむ非協力がとが背反的に存在していたのである。そこに労働運動の指導者としてのラーイの歴史的制約があったように思われる。

ところで、ラーイは、教育を受けた人々が土地の耕作者と労働者から孤立している限りスワラージを達成できないとのべたが、²⁰⁾ 彼の農民についての具体的発言はそれほど多くはない。1914年に99%が政治に無関心であると指摘したインドの農民にかんして彼らをとらえる方法をヨーロッパに借りることはできなかった。ラーイは農村における活動家をも育てたが、社会の殆どすべての分野に及んだラーイの思想と活動のもっとも弱い部分がここにあり、その故にこそこの段階ではラーイはガンディーの指導力を認めたのであろう。

ナーグプル大会以後、ラーイはバンジャール州会議派議長として議会、裁判所、学校、外国商品のボイコットの運動を指導し、1921年12月3日に逮捕され、1923年8月まで獄中生活を送っている。この間、インドの民族運動史上きわめて重要な事件がおこった。1922年2月、UP州ゴーラクプル県チャウリーチャウラー村で民衆が22名の警官を閉じこめて焼打ちした事件であり、これを機にガンディーは非暴力抵抗運動を全面的に中止した。この月、獄中から会議派運営委員会にあてた手紙のなかで、ラーイは、過去18ヶ月間ガンディーが偉大であるが故に我々は自分の適切な判断よりも彼の決断を優先させ、その結果いま敗北の苦い薬を飲まなければならないと悔悟する。²¹⁾ そして、1920年12月からの「一年以内の自治達成」という性急な目標からすれば我々はむしろ非暴力の雰囲気をつくりだすことに著しい成果を収めたとラーイは反論した。彼によれば、暴力を人間から、また、現在闘っている規模の政治闘争から全面的に拭き去ることは不可能であり、ガンディーの規準はあまりに高く、もし人間が不可能事をなしう

17) 関 嘉彦『英国労働党の社会主義政策』東洋経済新報社、1954年、44頁。

18) Feroz Chand, Lajpat Rai and Relevance of his Ideas Today, Chandigarh, 1972, p. 13.

19) Purshottam Nagar, Lala Lajpat Rai-The Man and His Ideas, New Delhi, 1977.

レヴリはこの辞任にむけてガンディーの圧力があったと指摘している。

(C. Revri, The Indian Trade Union Movement, New Delhi, 1972, p. 86).

20) V, p. 160.

21) VI, pp. 88-96.

る超人であるならば改めてガンディーの指導は必要でないとした。結論として、ラーイは、ガンディーの指導下で不服従運動がありえないとすればこれをプログラムから取除くべきであると提起している。ガンディーはこれだけの規模の闘争であるが故にチャウリーチャウラー事件のなかに将来におけるもっと深刻な危機の到来を予測したのであろう。しかし、他の民族指導者がいかにガンディーの決定に批判的であれ、非暴力抵抗運動がガンディーの決断を機として中止されたことは、当時の大衆運動とその指導の側がガンディーを超えることができなかった事実を示すものであろう。

ラーイにおいても、チャウリーチャウラー事件以後、ガンディーに対する以上にムスリムにたいする不信感がふきだした。すなわち、ヒンドゥー・ムスリムの統一にたいするガンディーの貢献を認めながらも、ラーイは、パンジャブにおいて教育を受けたムスリムの大部分が非協力運動に加わらず、運動を失敗に終らせたとする考えを表面化させるのである。AITUC 創立の時期に労働者階級の組織化がヒンドゥー・ムスリム間の摩擦を克服する論理として提出されていたことを確認するとき、ラーイがこの論理を経由させることなく「教育を受けた階級」の内部における「ヒンドゥー・ムスリム問題」に踏み込んでいくのを知るのである。

いまや、非協力に代ってラーイが選んだ道は、もはや「民族主義者」でなくなった「穏健派」を追放するための中央・州議会への参加であった。彼は、経験に裏付けられた政策の変更は道義に反せず、変化は進歩の必要条件であるという政治の「原理」を説いたが、「穏健派」と「コミューナリスト」の批判を目的としたラーイの議会活動はやがて迷路に入りこむ。そこにイギリス植民地支配者が仕組んだ落とし穴があり、ラーイの「リアリズム」は植民地支配の現実の報復を受けねばならなかったのである。

二 民族教育論とその実践

非協力をめぐってガンディーと意見を異にしたにもかかわらず、1920年代のラーイの活動のうち、民族教育の分野における実践は異彩を放っている。ラーイはすでに1890年代から20年以上にわたりアーリヤ・サマージ系の DAV カレッジの管理・運営にあたる経験をもっていた。しかし、アメリカ滞在中の1918年に執筆した『インドにおける民族教育の問題』のなかで、彼は、DAV カレッジが教育を受けた者と受けない者とのあいだの溝の解消、技術教育、政府の保護・援助から独立した民族教育の計画という目標の達成に失敗し、逆にその方針の根本的転換によって多かれ少かれイギリス支配者の信頼をえることになったと批判している。²²⁾ アーリヤ・サマージのもう一つの派のグルクルは独立した機関であったが、DAV カレッジは官立のパンジャブ大学に加入していたのである。ただ、この書物は、愛国心教育や教育用語の問題などに言及してはいるが、欧米の教育論や教育制度の影響を受け、民族の伝統にたいする自己

22) Lajpat Rai, The Problem of National Education in India, London, 1920, pp. 20-22.

満足の礼讃を戒め、「民族的でも国際的でもない」普遍的真理の存在を強調し、社会のなかで責任を以て行動できる市民の育成を説いていた。ここでは、植民地支配にたいする抵抗のなかでうまれたインドにおける民族教育の歴史については全体として否定的な評価が下されている。ラーイの国際的視野の広さを民族教育の場に適用するためには第一次世界大戦後のインドの現実をくぐらなければならなかったが、非協力プログラムをめぐるガンディーとの対立は、ラーイの民族教育論と現実との最初の摩擦を示すものであった。

そして、非協力決議を支持してまもなく、ラーイは DAV カレッジの管理に携わっていたときの同僚、ハンス・ラージと真向から対立した。²³⁾ 1921年1月15日、ラーイはハンス・ラージへの公開状のなかでカレッジの「民族化」を要求し、アーリヤ・サマージはガンディー登場のはるか以前からその始祖が説いた理想、スワデーシーと非協力の原則を近年見失っていると評し、いまこそカレッジを独立した大学にする絶好の機会であると訴えている。また、この手紙のなかでは、授業料の減収を心配するのであればその補償の一つとしてあなたの名義で銀行に5万ルピーの預金を行なうと提案する「リアリズム」も忘れなかった。これに反論するハンス・ラージもその「リアリズム」においては負けてはいない。彼は、政府やパンジャブ大学と協力しながら運営することは我々の任務とのべたのち、独立の大学それ自体には賛成であるがこれを効果的にするには1千万ルピーが絶対に必要で、アーリヤ・サマージがこれを集めることは不可能であるとした。さらに、彼は、独立した民族学校、ないしは同じ主旨の学部をカレッジ内に開設するつもりであり、独立した大学はラーイ自身が手がけるならば協力する用意があると逆に下駄を預けた。これにたいして、ラーイは1千万ルピーを必要とする根拠はなく、現在カレッジは立派な建物、高価な土地、そして金庫に60万ルピーをもっていると指摘して、カレッジを民族大学あるいはダヤーナンダ大学にすることを重ねて求めている。いかにも「商業カースト」らしい「計算」をまじえての「民族化」論争であったが、この論争はかつて青年達の民族意識を養ううえで貢献したアーリヤ・サマージも、1920年代に入るとその重要な活動分野である教育面で民族的抵抗のために動きうる余地の少ないことを示していた。このち、ラーイは DAV カレッジの学生にボイコットを訴えたが、1920年1月27日には950人中40人、翌28日には8人しか登校しなかった。²⁴⁾

ラーイは、1906年にプーナでティラクとゴーカーレーに会った頃から民衆のための奉仕家の養成機関の設立を考えていた。しかし、彼の構想が具体化するのアメリカからの帰国後の1920年12月であり、ラーイ自身も一時期関係していたニューヨークのランド社会科学研究所に範をとり、ラーホールの自分の家族の敷地を提供してティラク政治研究所(Tilak School of Politics)を開設してみずから所長となった。アメリカの研究所をモデルとしたことは彼の政治理念を知らううえでも興味深い。この研究所は2、3人の有給講師、多数の無給協力者、そして15～25ル

23) *The Tribune*, Jan. 18, 1921 and Jan. 22, 1921.

24) S. C. Mittal, *Freedom Movement in Punjab (1905-29)*, Delhi, 1977, pp. 186-187.

ピーの奨学金をもらう学生で発足し、正規の授業のほか一般向けの夜間学級も開かれていた。やがて、非協力のプログラムに沿って官立学校をボイコットした学生のために会議派がパンジャブ民族大学 (Punjab National College) を 1921年に創立すると研究所の教育活動はこの大学に移される。しかし、研究所の奨学金制度はそのまま維持され、奨学生は民族大学の学生となった。そして研究所そのものは、終身メンバーの組織へと衣更し、1921年11月、ガンディーの立会いのもとで発足した人民奉仕者協会 (Servant of the People Society) へと変わったのである。以後、協会は民族大学にスタッフを提供したが、ラーイ個人の蔵書を基礎として、友人の名をとってうまれた研究所のドゥワルカダース図書館 (Dwarkanadas Library) もこの協会に引継がれた。²⁵⁾ ガンディーがこの協会の設立に手を貸し、ガンディーと親しかったビルラー一族がその活動を援助していることは、ガンディーとラーイの活動をその対立面においてのみみることの誤りを示すものであろう。

パンジャブ民族大学では講義はヒンドゥスターニーでなされた。大学の特色はラーイの個性を反映する教授陣の多様さと教授・学生をつつむ民族の独立への情熱とにあった。第一次世界大戦期のティラクと並ぶ「ホーム・ルール」運動の指導者 アニ・ベサント夫人に見出され、オックスフォードで近代史を学んで帰ったアーチャーリヤ・ジュガルキショール初代校長 (1921—25) は、リベラルな雰囲気を校内に持ちこんだが、彼はその後ガンディーのアーシュラムや民族教育の学校で働き、独立後は UP 州の労働、社会福祉、教育の各相、ラクナウ、カーンプル両大学の副学長をつとめている。これとは対照的に、DAV カレッヂに学び卒業後も同じ場所で教鞭をとり、長らくアーリヤ・サマージの海外布教活動に従事したバーイー・バルマーナンドは質素な生活態度を保ち、ガダル党の指導者とみなされていたいわゆる第一回ラーホール隠謀事件に連なり、死刑判決 (のちに終身刑に減刑) をうけたが1920年に釈放された。「反乱の生きた模範」である彼のアンダマン監獄での苦闘の「講義」は学生達の共感を誘った。²⁶⁾ やがて彼はラーイと共に1920年代のヒンドゥー・マハーサバーの活動を荷うこととなり、革命運動とコミュニズムの交錯を彼自身のうちに体现している。このほか、アーリヤ・サマージのもう一つの派のグルクルに学び、現に革命家達と接触を保っていたジャヤチャンドラ・ヴィディヤランカールの 教室における 討論は その後の 革命家 グループの誕生の芽をつくるが、²⁷⁾ 1921年に DAV スクールを放棄して 民族大学に入り1924年まで在籍したバガット・シンもこのグループの一人である。ヴィディヤランカールは1930年代には AITUC のパンジャブ支部や農民学校で活動し、独立後はパンジャブ州 会議派政府の労働・教育・保健の 各相となり、1947年 5 月にバテールが 創設した会議派系の労働者全国組織、インド民族労働組合会議

25) *The People*, March 7, 1926, March 21, 1926, March 8, 1928 and April 13, 1929 (Lajpat Rai Number).

26) Virendra Sindhu, Amar Shahid Bhagat Singh, Nai Dilli, 1974, pp. 11-12.

27) Yashpal, Sinhalokan, Bhag 1, Laknau, 1964, p. 74.

(Indian National Trade Union Congress=INTUC) にもかかわっている。総じて、民族大学は、いまや「保身」的となったアーリヤ・サマージの「革命的」伝統を引継ぎつつ、他面その「コミューナリズム」の払拭にも苦しんだといえよう。

民族大学の若い教授や学生の革命意識を培ううえでドゥワルカダース図書館が果たした役割ははかりしれない。第一次非暴力抵抗運動期には獄中の政治犯に書物を貸出した²⁸⁾ この図書館は、ラーイの同時代の世界を知ることへの限りない欲求にも支えられて青年達に灯をともし続けた。マツティーニ、ガリバルディーの伝記、ダン・ブリーンの『アイルランド解放闘争』、ロシアの女性革命家フィグネルの生涯、アメリカの作家アプトン・シンクレアの小説は彼等によってむさばるように読まれた書物の一部である。²⁹⁾ また、のちに UP 州カーンプルで社会主義運動に加わった館長ラージャラム・シャーストリーが読んだ書物はその後のインド史に大きな衝撃を与える事件をうみだしている。彼が手にした『無政府主義その他についての論集』には、1893年にフランス議会で爆弾を投下したヴァイヤンが平和的な抗議の積重ねののち支配者への警告の行動に至った過程を語る法廷陳述がのせられていた。この文章に感動した館長が書物をすすめた学生の一人にバガット・シンがいた。³⁰⁾ 彼が1929年4月8日にインドの中央議会に爆弾を投じた際まいたビラの冒頭にはヴァイヤンの「耳なき者に聞かせるには大きな声が必要である」という言葉が引かれている。バガット・シンの議会活動にたいする批判は、晩年その議会を活動の場としたラーイが育てた民族大学のなかで培われていたのである。

このほか、人民奉仕者協会は、ウルドゥー語の日刊紙『バンデー・マータラム』に加えてラーイとフェローズ・チャンドが編集する英語の週刊紙『人民』(The People) を1925年7月から発行した。この『人民』紙には、1926年から27年にかけてアグネス・スメドレーが何回か寄稿し、その一つにおいて名指しではないがラーイの「コミューナリズム」を批判している。スメドレーのインドへの関心もまたアメリカ滞在期のラーイに導かれることが大きかった。また、この週刊紙には、ジャーナリスト、K. K. カワカミ(河上清)も記事を寄せている。

バガット・シンとスメドレーのラーイ批判は、ラーイの思想的な幅を物語ると同時に、彼の1920年代の議会活動と「ヒンドゥーの利益」擁護論が彼のもとで育った人々に深い悲しみと失望を与えていたことを明らかにするものであった。

教育とジャーナリズムの面での活動とともに、協会は、不可触民の地位向上と労働者の組織化、諸々の救援活動にも力を注いでいる。ラーイが不可触制と労働問題をインドの民主主義の問題としてとらえ、労働する者に他のすべての人々と平等の地位を保証することに真の民族解放を見ようとしたことは注目される。労働運動についてと同様に不可触民の運動においてもラ

28) *The People*, March 21, 1926.

29) Yashpal, op. cit., p. 80.

30) Sindhu, op. cit., p. 13 and p. 32.

ヴァイヤンについては、J. ジョル著、萩原、野水訳『アナキスト』岩波書店、1975年、149—150頁。

ーイは教育の果す役割を重く見る。彼の方法は教育、連携、組織という彼自身の言葉に要約されている。まず我々は自己教育をおこない、次いで我々の考えを彼等に伝え、彼等と結びつき、不可触民の自力による組織化を助けるというものであった。彼はアーリヤ・サマージのシュッディー運動の流れを汲みつつも、「彼等が自由でなければ我々もまた自由でありえない」とする解放の思想をさぐりあてている。³¹⁾

しかし、1923年に獄外に出たラーイが「不可触民は待てない」と発言し、彼等への奉仕、自立のための援助を訴えたとき、彼に呼応したのは J. K. ビルラーであった。まもなく、ラーイは全インド不可触民解放会議 (All-India Acchut Uddar Committee) を結成するが、1927年度には、J. K. ビルラーが月額3千ルピーをこの会議のために寄附している。この会議は主としてパンジャブと UP 州において識字運動、衛生教育、経済的改善、技術の提供、アーシュラム、協同組合の開設などに努めた。³²⁾ インド独立後第二代の首相となったラール・バハドゥル・シャーストリは当時この分野で活動していた。パンジャブにおいては、協会は掃除人のカースト、バルミークを組織し、また官吏や地主のためのベーガール（無償労働）廃止の運動も起している。

ガンディーは「ラーラジー（ラーイ）が生涯においてはかに何もしなかったとしても、我々ヒンドゥーは不可触制にたいする宣戦の故に彼に崇高な思い出を抱いたであろう」とのべている。³³⁾ また、ガンディーを支えた G. D. ビルラーも不可触制廃止のための活動に自分をひきつけた最初の人物はラーイであったと回顧している。³⁴⁾ ラーイが不可触制と労働問題を同一次元でとらえながらも、彼の不可触民解放運動の最大の援助者がインドの代表的なブルジョアジー、ビルラーであったことは、ラーイがインドにおける資本制とカースト制を内的に連関する支配の構造として必ずしも見ていないことを示すものであろう。

ラーイが1926年に ILO の会議にインド労働者の代表として出席したことはすでに指摘した。同年、ラーイは、中央議会を通過した労働組合法に反対の票は投じなかったが、イギリスの立法と比べて未登録の労働組合を保護の対象から外したことを成長期のインドの労働運動を規制するものとして批判した。さらに、1928年には、コミンテルンの使者がインドに入ることを禁ずるとの名目で提出された公安法の真の意図は Kommunismus の侵入を防ぐという名のもとに反政府運動と労働者のストライキを弾圧するものであるとして反対している。³⁵⁾ 議会の内部では労働問題に関心をもつグループをまとめる努力もしたラーイにとって、議会は政府の労働政策を批判し、労働者の権利を擁護する場としてもとらえられていたのである。

31) Lajpat Rai, *Ideals of Non-co-operation*, Madras, 1924, p. 31.

32) *The People*, April 13, 1929.

33) Nagar, *op. cit.*, p. 228.

34) G. D. Birla, *My Mentor in Politics in: N. N. Kailas, Lajpat Rai-His Relevance for Our Times*, New Delhi, 1966, pp. 41-42.

35) *Legislative Assembly Speeches of Lala Lajpat Rai*, Sep. 12, 1928.

このほか、ラーイは、協会のメンバーであるハリハルナート・シャーストリーをボンベイとアフメダーバードに送って労働組合の活動を研究させている。ハリハルナートは工業都市カーンプルでジャーナリスト、ガネーシュ・シャンカル・ヴィディヤルティーの助けを借りて労働者の組織化につとめた。1928年2月には、彼は各号1パイサーの価格で小型4ページの週刊紙『マズドゥール』（＝労働者）をヒンディー語で発刊した。この新聞は、字の読める殆どすべての労働者によって読まれたといわれている。³⁶⁾ 1929年にカーンプル労働組合（Kanpur Mazdoor Sabha）が労働組合法下で再発足したとき、議長にはヴィディヤルティー、書記長にハリハルナートが就任した。³⁷⁾ 1930年代には AITUC の議長、第二次世界大戦後には創立期の INTUC の議長をつとめたハリハルナートの活動のなかに、広い意味の民族教育運動の指導者としてのラーイの役割を読みとることができよう。

かくして、ラーイの「社会改革」の思想、20世紀初頭に「過激派」といわれた民族自決の意識、第一次世界大戦期に身につけた国際的視野の基礎のうえに誕生したパンジャブ民族大学の活気に満ちた教育と人民奉仕者協会の地味な活動は、1922年以後の民族闘争の「沈滞」期にあって確実に次の飛躍を準備していたのである。それはラーイ自身の思想的な迷いをも超える形で進行していた。1928年のサイモン委員会ボイコット運動の昂揚は、パンジャブにおいてそしてインドにおいて突如としておこったものではない。バガット・シンはサイモン委員会ボイコットのデモの先頭にラーイを立たせ、同じ年、カーンプルではハリハルナートが議会内でラーイが批判した公安法、ならびにゼネストや同情ストを禁じた労働争議法に反対するデモを指揮していた。ラーイの民族教育運動の実践は、彼をものりこえる形で第二次非暴力抵抗運動期の様々な闘争のなかに吸収されていったのである。

インド独立後、民族大学と人民奉仕者協会に集まった人々は、インド政府の首相（ラール・バハドゥル・シャーストリー）、会議派の議長（ブルジョッタム・ダース・タンダン）、³⁸⁾ INTUC の議長、パンジャブと UP 両州の労働・教育相など会議派の指導層の一角を構成していった。思想的にも、ラーイの国際的視野と社会主義への関心は会議派左派に継承され、ラーイの自治領の地位獲得にたいする現実的接近、議会制度の利用、のちにふれるパンジャブ分割提案にみられる「ヒンドゥー・ムスリム問題」への対応、労働者の全国組織への関心はすべて直接的にはいえないにしても1930年代以降のパテールに接続している。しかし、1920年代のラーイには、パテールのような全体の行動を通じる一貫性は乏しい。それは二人の個性の相違によるとともに、それ以上にその個性を通じてあらわれた1920年代と1930年代の「ブルジョア民族主義」運動の力量に負っているように思われる。

36) B. N. Datar (ed.), Harihar Nath Shastri-Life and Work, Bombay, 1968, p. 17.

37) Ibid., p. 14.

38) タンダンは、ラーイの死後、ガンディーの承認もえて人民奉仕者協会の会長に就任した。1950年に会議派議長に選ばれた彼は「伝統」を重んずる政治家として理解されているが、1920年代には、ラーイが創立期に参加したパンジャブ・ナショナル銀行の経営に加わっている。

それ故にこそ、1920年代のラーイは独立後の会議派の指導層に限られない様々の群像をもその思想の据野にうみだしえたのであろう。

しかし、このように多彩な人物をうみだしながら、ラーイ自身は何故「ヒンドゥーの利益」に固執したのか、この疑問に改めてかえらなければならない。

ラーイは獄中にあった1921年12月から翌年1月にかけてウルドゥー語で『インド史』を書いた。彼の書物に、第二次世界大戦期にやはり獄中で書かれたネルーの『インドの発見』の思想の奥行きを期待することはできないし、ラーイ自身独創性を主張していない。だが、1898年に書いた書物の改訂版の形をとったこの『インド史』には、青少年に、政治史でも王の歴史でもなく、戦争の歴史でもなく、インドの現状がいかんしてつくられたかを伝えたいとする民族教育運動の実践者ラーイの切実な気持が強く働いている。アショーカ王を歴史に比類ない人物とえがき、³⁹⁾ 古代インドの村落に民主主義が存在したと論ずる⁴⁰⁾ ラーイの見解は「常識」的であろう。しかし、これらを手掛りとして批判したのは、民族主義の名におけるヨーロッパの植民地主義、そして民主主義と議会制度をたてまえとした富者への権力の集中である。このように近代ヨーロッパを批判しながらも、ラーイは他国の範に学んでこなかったインド文明の狭量さを認め、⁴¹⁾ とくに不可触制の存在をインド社会の重大な汚点であるとしていた。⁴²⁾ ラーイの強烈な民族意識はその発揚の契機をインド史に求めながらも、欧米の制度、思想、運動に学ぶ「プラグマティズム」は、「インド文明」についての誇りを相対化させていた。しかし、彼が欧米との接触を通じてえた普遍的な「真理」と「知識」の存在という理解の仕方、それに伴うヒンドゥーイズムの相対的把握は、イスラームの生活、信仰、制度と対面したときも貫かれたのであろうか。

三 議会参加と「ヒンドゥー・ムスリム問題」

一般的に、ラーイはヒンドゥーとムスリムの統一を支持したがその統一は多数であるヒンドゥーの利益を犠牲にするものであってはならないと主張したと理解されている。彼は、1927年4月、ヒンドゥー・サンガタン（組織）運動にふれて、まずコミュニティーとして、次いで民族として自己の利益を守らなければならない、時には両者の利益を同時的に守らなければならないとのべ、「コミュニナリズム」を擁護している。また、世界への旅行を通じて「ヒンドゥー文化とその生活ほど科学的で精神的な文化、ないしは生活体系はない」と正直に信じていることを明らかにした。⁴³⁾ この発言は、第一次世界大戦末の民族教育についての著作のなかで展開された論理の基調との大きな隔りを感じさせる。後者においては、インドの誇るべき「伝統」

39) Lajpat Rai, *Bharatvarsh ka Itihas* (transl. into Hindi by Santram), Bhag. 1, Lahore, n. d., p. 172.

40) Ibid., pp. 314-315.

41) Ibid., pp. 349-350.

42) Ibid., pp. 329-330.

43) *The Tribune*, April 15, 1927.

にたいする見方を相対化させていたからである。その限りでは、ラーイは「世俗主義者」であった。そしてこの「世俗主義」の基礎がなければ労働運動にたいする影響力はうまれえなかったであろう。

この点で、ラーイの「コミュナリズム」の思想は、1920年代のパンジャブの政治的・社会的状況に結びつけて考えられなければならない。⁴⁴⁾ 同州においては、ヒンドゥーが商業、金融面において優位を占め、民族運動においても積極的役割を果たしていたが、人口においてはムスリムが約半数を占めるのにたいし、ヒンドゥーは約8分の3で「マイノリティー」であった。イギリスもまた、植民地支配の安定した基盤を農村で多数を占めるムスリムの地主・農民層に求めてきた。1919年の「改革」の後の州議会において、23名の任命議員を除く71名の議員構成は、ムスリム35名、ヒンドゥー21名、シク15名である。そして、かつてはパンジャブ州会議派議長をつとめ、ガンディーの非協力に反対して会議派を去ったラーホルのムスリムの弁護士ファズリ・フセインは、ムスリムのほかにヒンドゥー、シクも加え、都市出身者も入れて「農村ブロック」(Rural Bloc)を構成し、官僚派議員の支持もえて多数を獲得し、農村における教育や「地方自治」に力を注ぎ、民族主義者による議会ボイコットの間隙を縫って発言権を強化していった。この「農村ブロック」は1923年に民族連合党(National Unionist Party)となり、1937年にはパンジャブ州の政権を掌握した。

しかし、ラーイを警戒させたのは、ムスリムだけでなく、ヒンドゥーの一部がファズリ・フセインに同調したことである。当時のパンジャブ州、現在のインドのハリヤーナー州のロータク県を中心としてジャート農民の要求を汲み上げていったチョートゥ・ラームの動きがこれである。1912年にロータクで弁護士を開業したチョートゥ・ラームは、都市住民の「農民蔑視」に反発し、ヒンドゥーの金貸しバニヤーの横暴の下で負債に苦しむ農民、ザミンダールをカースト組織、ジャート・サバーに結集し、ジャート高等学校を建て、ウルドゥー紙『ジャート・ガゼット』も発行し、官職、議会への「農民」代表の確保を要求し、第一次世界大戦期には自己のカーストの地位向上のためにイギリスの募兵運動に協力している。⁴⁵⁾ カースト組織を通じての地位向上運動は当時のインドにおいて決してめずらしかったわけではない。しかし、ジャート(族)はヒンドゥー、ムスリム、シク当時のパンジャブにおいて約半数はムスリムにまたがっているため、カースト結社でありながら宗教を超えた「経済的利益」の共通性を基盤として「世俗的」運動であることを語りえたのである。かくして、チョートゥ・ラームは「後進階級と後進地域の向上」のため連合党の結成に加わった。⁴⁶⁾

1923年の州議会選挙では、ラーイは未だ、チャウリーチャウラー事件以後会議派内の議会参加派として登場したスワラージ党のメンバーではなく、みずから立候補もしなかったが、法律

44) V.C. Joshi, Lala Lajpat Rai-A Biographical Essay, Delhi, 1966, p. 46.

45) Madan Gopal, Sir Chhotu Ram-A Political Biography, Delhi, 1977, pp. 33-38.

46) Ibid., pp. 58-59.

家や商人出身者からなるスワラージ党の候補者を支援した。しかし、選挙の結果は、連合党を中心とする「穏健派」の優位はゆるがず、しかも連合党議員の大部分はムスリムであった。そして、翌年9月には、チョートゥ・ラームが州の農業相に就任している。このように、ラーイの発言を支えるヒンドゥーの中間層や商人層は、ムスリムの「教育を受けた階級」と土地所有者層によってだけでなく、彼等と協力し、議席や官職の分配を求めるヒンドゥーの土地所有者層（ザミーンダール）からも挑戦をうけたのである。しかも、連合党は、部分的州「自治」のもとであるとはいえ会議派に先んじて権力機構の一端に加わっていた。こうした事態をラーイは深刻に受けとめざるをえなかった。したがって、分離選挙区制廃止のためのラーイの民族主義者としての闘いは、流通機構を握るヒンドゥーの権益の擁護のための闘いと微妙に交錯する側面をもっていたと思われる。ラーイのチョートゥ・ラーム批判は、後者のザミーンダール党が地主に味方するのがあるいは小作人に味方するのかを問い、都市に出てきたザミーンダールの矛盾をついていたが、⁴⁷⁾ より広い耕作農民の解放という課題をラーイが提起していたとはいきれない。「私は金貸しの同盟者ではない」とことわりながらも、ザミーンダール党を「貧しい耕作者と金貸しの血で太ろうとする飽食した地主の党」と規定していることも偶然とはいえないであろう。ちなみに、パンジャブにおいて会議派が農民層のあいだに支持基盤を獲得したのは、1950年代とみてよいであろう。

ヒンドゥー・ムスリム間の関係はチャウリーチャウラー事件後緊張の一途をたどった。ムスリムの指導者の多くはこの事件に際してのガンディーの決定によってヒンドゥーとの「統一」に希望を抱くことができなくなり、ケマル・トルコによるカリフ制の廃止はキラーファト運動指導者に方向を見失わせていた。ヒンドゥーとムスリムをまきこむ暴動は急速に増え、ヒンドゥーの指導者はサンガタンとシュッディーの運動を通じて、キチルーほかムスリムの指導者はタンズィーム（組織）とタブリガ（改宗）の運動を通じて互いに対抗し、それぞれの結束を強めようとした。

すでに1921年、マラーバルのムスリム農民の反乱に際して、ラーイはこれを農民反乱としてよりもヒンドゥーにたいするムスリムの強制改宗、殺害、略奪としてとらえ、ムスリム指導者にたいし、ヒンドゥーに危害を加えたムスリムに同情しない旨明言するよう求めていた。⁴⁸⁾ パンジャブでは、1922年9月、ムスリムの祭ムハッラムの行進をめぐって暴動がおき、同州の人々に強いショックを与えた。こうしたなかで、ラーイのムスリムにたいする態度を決定的に硬化させたのは、1924年9月、北西辺境州のコーハートでおこった暴動であった。155人のヒンドゥーの死傷者をだしたほか、4千人のヒンドゥーすべてがラーワルピンディーに脱出したといわれている。ラーイは犠牲者に保護の手をさしのべない政府を非難し、問題の「科学的」説明をせずにヒンドゥーの「臆病」を指摘して21日間の断食に入ったガンディーにも批判

47) *The People*, March 27, 1927 and April 17, 1927.

48) *The Tribune*, Oct. 28, 1921.

の矢を向けた。

同年11月から12月にかけて、ラーイは会議派指導部を退いた自由な立場で発言するとして、トリビューン紙に『ヒンドゥー・ムスリム問題』と題する長文の論文をのせている。この論文を貫くものは、政治と宗教を分離した「世俗主義」と「民族主義」、それを基礎としたヒンドゥー・ムスリム双方の「正統派」批判、とりわけムスリムの教義、宗教指導層ならびに知識人への歯に衣着せぬ攻撃である。

論文のなかで、ラーイは、ガンディーが民族的抵抗の意識を大衆にまでもたらしたことを讃えながらも、その過程で宗教的狭量さをも擁護し、パンディット（ヒンドゥーの学者）やマウルヴィ（ムスリムの学者）を生き返らせ、宗教上の「絶対的自由」の主張をはびこらせ、宗教的・社会的生活における合理性と寛容とを認めない傾向を促進したとのべている。⁴⁹⁾ とくに、キラーファト運動が宗教を政治的運動にもちこみ、汎イスラーム主義を民族主義より優先させたと論じた。その際、ラーイがムスリムの「コミュニナリズム」の対極に、ヒンドゥーはインド人以外でありえず、他に振向くべき国家・民族をもたないという「絶対的」に優位の論理を用意していたことに注目すべきであろう。⁵⁰⁾

にも拘らず、この段階では、ムスリムのタンズィーム運動とヒンドゥーのサンガタン（あるいはヒンドゥー・サバー）運動について冷静な把握に努め、サンガタン運動は反ムスリムを目標していないが、反ムスリムであることが運動を活発にしていることを認め、この二つの運動はヒンドゥーとムスリムのあいだの緊張を増大せざるをえないとしている。また、ラーイはシュッディー運動についても、不可触民の地位向上のような人道的側面があり、ムスリムが改宗運動を続ける限り止めることはできないとしながらも、アーリヤ・サマージの「攻撃的ヒンドゥーイズム」とは一線を画そうとしていた。ラーイの思想の「合理主義」が辛うじて持ちこたえている側面がここにはあった。

しかし、ヒンドゥー内部の論争にあってはヒンドゥーであることを相対化しえても、ひとたび対ムスリム関係に及ぶときラーイの柔軟な思考に硬直化がみられる。彼は、ヒンドゥーイズムを世界のすべての大きな宗教のうちでもっとも寛容な宗教とし、イスラームをドクトリンとドグマの信仰と評したが、⁵¹⁾ ヒンドゥーイズムの「寛容」はここではイスラームにたいしてよりもカースト制度をふくむヒンドゥーの社会制度に向けられていた。

ラーイによれば、ヒンドゥーの民族主義者がインドをスワラージに近づけたのにたいし、ムスリムの教育を受けた者は若干の名誉ある例外を除きごく最近までこうした努力に反対し、ヒンドゥー・ムスリム間の暴動においてもつねにムスリムが加害者であり、賢明な人々が暴徒を

49) Ibid., Nov. 28, 1924 and Nov. 30, 1924.

(なお全文は VI, pp. 170-222 にまとめて収められている。)

50) Ibid., Dec. 12, 1924.

51) Ibid., Dec. 3, 1924.

操っているとした。⁵²⁾

ラーイのムスリム批判はとくにムスリムの「教育を受けた階級」にきびしい。彼は、「ムスリムとヒンドゥーの地主の思うがままの犠牲になっている何百万人のムスリムがいる。ムスリムの指導者は彼等の教育上、経済上の問題を改善するために何をしてきたか。若干の教育を受けたムスリムに官職を用意しても現状の解決にはならない」と論ずる。⁵³⁾彼の念頭にはもちろんパンジャブ州議会で影響力を行使している連合党の存在があった。しかし、農民の教育的、経済的問題をムスリムに問うとすればそれはひとしくヒンドゥーにも問われるべきものであり、そこにこそ「ヒンドゥーとムスリムの統一」への契機も存在したであろう。

ラーイが、インドの議会制度のなかでもっとも厳しく批判したのはコミュニティー別分離選挙区制であった。彼はヒンドゥーとムスリムの対立を基本的にはイギリスの植民地支配の産物とみ、両者の権力獲得をめざす争いの反映と理解したが、分離選挙区制廃止のための「民族主義」の立場からの闘いは、他方においてヒンドゥーとしての権利の擁護に固執する限り、ますます出口のない闘いへと自身を追いこんでいった。

パンジャブ州分割の提案は、ラーイの分離選挙区制への反対のなかからうまれたものである。ラーイは、パンジャブにおけるムスリムのための分離選挙区制はかつてこの地の支配者であったマイノリティーのシク（人口比9%）のムスリムにたいする反発を導き情勢をさらに險悪にするとして、「多数支配」を実質的なものとするためにムスリム多数地域の西パンジャブとヒンドゥー、シク多数地域の東パンジャブに分割することを提案した。しかし、この案に沿ってムスリムがさらに北西辺境州、シンド、東ベンガルなどを加えれば、これはもはや統一インドではなく、ムスリム・インドと非ムスリム・インドへの分割であるとラーイは警告している。⁵⁴⁾ この提案はヒンドゥーの側から出された「ムスリム国家」論として引合いに出されることが多い。ラーイは分離選挙区制の廃止かそれともインドの分割かとして迫ったのであるが、論文の終りににおいてヒンドゥー・ムスリム問題解決のための提案の一つとして重ねてふれている。この提案が、1947年3月、パンジャブのコミューナル情勢が緊迫するなかで事態緩和の方策としてパテール主導下の会議派運営委員会を通じて再生するのを見ると、ラーイ個人の私的な発想として済ますことはできないであろう。

ラーイの「合理主義」は、第一次非暴力抵抗運動期にガンディーに道を譲ったように、ヒンドゥー・ムスリム関係の緊張した時期には、パンジャブの政治状況に媒介されながら、「ヒンドゥーの利益」というとらえがたい「非合理」に抗しきれなかった。しかし、この不気味な潮流に流されきっていないところにラーイの思想の強靱さもあった。いずれにせよ、この論文がラーイの政治的活動に時期を画する意味をもっていたことはたしかである。

52) Ibid., Dec. 5, 1924 and Dec. 17, 1924.

53) Ibid., Dec. 14, 1924.

54) Ibid., Dec. 14, 1924.

この論文を執筆してのち、ラーイは次第にかつて彼が批判したヒンドゥー・サバーの運動に近づいていった。1925年に入ると、彼はヒンドゥー・サバーはコミユナル問題でヒンドゥーの利益を守る限度において政治に関心をもつべきであると考えてにいたり、⁵⁵⁾ 4月のヒンドゥー・マハーサバーのカルカッタ大会では議長をつとめ、サンガタン運動の推進をヒンドゥーの義務であるとし、シュッディー運動を防禦の運動として弁護している。⁵⁶⁾ このときでも、ラーイは他の信仰の攻撃に忙がしくヒンドゥーを真に自由することに失敗したとしてアーリヤ・サマージを批判し、「防禦」の組織マハーサバーに在ることの意義を示したが、民族解放の目標を見失わせるかにみえるラーイの発言と行動はきびしい批判の眼を逃れることはできなかった。10月、女流詩人の会議派指導者サロジニー・ナイドゥーは、少なくともラーイは「あらゆる狭いコミユナルな考慮をのりこえ、圧倒的挑発に直面しても一つの民族の意志をつくりだすために不動であってほしい」と痛切に訴えたが、ラーイはマハーサバーがコミユナリズムに沿っての選挙を認めぬ唯一のコミユナル組織であり、天使ではないヒンドゥーの運動の弊害を最少限に抑えるためには民族主義者の指導を必要としていると反論した。⁵⁷⁾ 少なくとも、ラーイはマハーサバーの動きについて危惧を抱いていたのである。

ラーイは、1925年末に、のちに生徒の弁論クラブにすぎないとよんだ中央議会の議員に選ばれ、翌年1月、スワラージ党の正式党员となるが、8月には党の議事ボイコット政策に反対して離脱し、9月にはマダン・モーハン・マーラヴィヤを議長とする独立会議派党（Independent Congress Party）を結成し、その書記長に就任した。議事ボイコットに反対した理由も、ムスリムが政府と組んで統治法を運用しようとしている以上ヒンドゥーの利益を擁護するためにもボイコットできないというものであった。議会制度は「コミユナリズム」を増幅させる回路ともなっていたのである。

1926年の中央・州議会選挙はラーイの「民族主義」と「コミユナリズム」を議会制度のなかでテストする機会となった。1926年9月、彼は、今日の政治においてヒンドゥーとムスリムではなくインド人だけが存在するというのは事実ではなく、達成すべき理想だとのべた。⁵⁸⁾ しかし、ラーイは政治と宗教を一方では分離し、ヒンドゥー・マハーサバーは候補者を立てるべきではなく、ヒンドゥーは真の民族主義者を送るべきであるとした。⁵⁹⁾ だが、ラーイはパンジャールブにおいてマハーサバーのメンバーの立候補を防ぐことができず、利己主義の優先する「汚ない選挙」はラーイを失望させた。パンジャールブ州議会において優位を占めたのは依然として36議席を獲得した連合党であった。ラーイは選挙後「我々はよき民族主義者でもなければよ

55) Ibid., Jan. 16, 1925.

56) Ibid., April 15, 1925.

57) Ibid., Oct. 24, 1925 and Oct. 25, 1925.

58) Ibid., Sep. 28, 1926.

59) Ibid., March 2, 1926 and Sep. 30, 1926.

きコミュニナリストでもなかった」と失意の気持を隠さなかった。⁶⁰⁾ ヒンドゥーとしての危機意識と政治は政治を知る者の手でという「合理主義」の結合への期待は、結局そのいずれをも満たすことなく失敗に帰したのである。この選挙ののち、ラーイは、マハーサバーの反ムスリム感情を煽るだけの「モブ・メンタリティー」にも同調できず、⁶¹⁾ また、その指導者が口先では政府にたいしてきびしい言葉を吐くがいざというときには政府に従う態度にも与しえなかった。⁶²⁾

1926年以降、ラーイはスワラージスト達とも別れ、ヒンドゥー・マハーサバーとの関係も摩擦を伴った。民族主義の枠のなかで合理主義的政治接近とヒンドゥーの利益の擁護を一方で分離し、他方で結合するというラーイの行動からすればそれは当然の結果でもあった。スワラージストの「世俗主義」は「コミュニナリズム」によって切られ、ヒンドゥー・マハーサバーの「コミュニナリズム」は「民族主義」と「世俗主義」によって切ることができるからである。ラーイの思想はときに「バランスのとれた」思想として彼の信奉者やその類の研究者によって讃えられる。しかし、ラーイ自身は両刃遣いに熟達していたというよりも隘路を懸命にさまよい続けたのである。

ラーイがより広い世界に立ち返ることはあった。1925年11月、ラーイはトリビューン紙に次のような文章をのせている。⁶³⁾

「ボンベイの工場労働者が生活し、育ち、死んでいくみじめな労働者居住区を通り過ぎ、ミルクを求めて泣き叫ぶ子をかかえた母親が石を切り、レンガやモルタルを運び、土とわらを混ぜて王族や金持ちのための御殿を建てる建設現場を見るたびに苦痛、苦悶が私の身体のなかを走り、自分がこのような体制への加担にいか^に責任があるかを悟るのである。誰がどのような主義を受入れ、どのようなカースト、信仰、皮膚の色を持っているかは私に関係はない。」

にも拘らず、ラーイは「生活をおるべき姿においてではなく、あるがままにとらえる」ことを現実の社会的行動のために必要であると考えたのである。その現実とは「宗教的コミュニティーによって分けられた」インドであって、現在でもインドの都市で普通に見られ、ラーイが痛みを覚えた労働者の現実ではなかった。彼は「現実を無視し、天高く飛ぶならば功をおさめることはできない」としたが、実際には、ラーイは彼の重視した現実によって裏切られたのである。そこに、労働運動の指導者としてのラーイの政治的選択の悲劇があった。

1927年11月、インド統治法の運用を調査し、新しい法を用意するためサイモンを委員長としてイギリス議会の7名の議員で構成されるインド人ぬきの委員会が任命された。1928年のインドはサイモン委員会ボイコットの嵐で激動した。そうしたなかで、不可触カースト、マハール

60) Ibid., Dec. 16, 1926.

61) Ibid., Aug. 12, 1927.

62) Ibid., April 17, 1928.

63) Ibid., Nov. 10, 1925.

出身のアンベードカルは、ボンベイにおいて、不可触民のために分離選挙区制を要求する証言を委員会のまえで行なっている。ラーイは、アメリカ滞在中、当時留学していた20代のアンベードカルを知り、彼自身深い関心を寄せてきた不可触制について意見を交換することもあった。⁶⁴⁾ しかし、サイモン委員会でのアンベードカルの証言は民族主義者ラーイの怒りをよびおこした。ラーイは、アンベードカルや彼が依存している政府よりもカースト・ヒンドゥーが不可触民のためにいかに多大の援助を行なってきたかを振り返り、なかでも、ビルラー一族、とくに、J. K. ビルラーがここ5年間に行なった資金援助、彼らの寛大さと愛国心とを讃えたのである。⁶⁵⁾

ラーイは、アーリヤ・サマージに属していたとき、シュッディー運動による不可触民の地位向上を考えていた。1920年代、シュッディー運動は頂点に達し、⁶⁶⁾ アーリヤ・サマージの枠をこえ、ヒンドゥー・マハーサバーをふくむコミュニスト・グループによって荷われていたが、運動の中心は「不可触民」を「可触民」の地位に上げるよりも、ムスリムのヒンドゥーへの再改宗に移っていった。民衆への奉仕よりもムスリムへの「攻撃」に的を据えたアーリヤ・サマージの活動を非難したラーイが、サイモン委員会で証言することも辞さないアンベードカルを批判する不可触民解放運動の新たな拠り所をビルラーの「寛大さと愛国心」に求めたことは、一方においてインドにおける資本主義の成長を、他方において社会主義と労働運動に関心を払い続けたラーイの解放思想の歴史的な性格を物語るものであろう。

1928年7月、G. D. ビルラーにあてた私信において、ラーイは「すべてに、私自身、神、人間、生活、世界に信頼を失った」と沈痛に語っている。⁶⁷⁾ ビルラーはラーイの絶望感は病気に帰因するものであると慰めたが、ラーイは聞き入れなかったという。晩年彼は健康に恵まれなかったが、サイモン委員会ボイコットの激動のなかでの心情の吐露は、1920年代のラーイの政治活動の軌跡がいかに実り少ないものとして彼自身によって受けとめられたかを示している。しかし、民族解放の新たな息吹きは再びラーイを動かすのであった。

1926年の中央議会選挙に立ったラーイの演説会場で反対のビラを配り、「パンジャープの獅子はひな鳥の心臓の持ち主（＝臆病）となった」と皮肉の言葉をのべたのは、パンジャープ民族大学に学んだバガット・シン、バグワティーチャランらであった。⁶⁸⁾ この年3月、彼等はラーホールで青年インド会議（Naujawan Bharat Sabha）を結成していた。彼等が目標に掲げたコミュニズムの克服と労働者・農民の組織化は、1919年にラーイがパンジャープ人にあてたメッセージと一致するものである。彼らはラーイを厳しく批判していたが、ある意味ではラーイ批判を通じてラーイを継承していたのである。

64) W. N. Kuber, Dr. Ambedkar-A Critical Study, New Delhi, 1973, pp. 165-166.

65) *The Tribune*, Oct. 27, 1928.

66) J. F. Seunarine, *Reconversion to Hinduism through Śuddhi*, Madras, 1977, p. 39.

67) VI, p. 417.

68) Manmathnath Gupta, *Kranti-Dut-Bhagat Singh aur unka Yug*, Dilli, 1972, pp. 112-113.

1926年2月には、パンジャブのシクの革命運動バッバル・アカーリー（獅子のアカーリー党）の指導者達が処刑された。しかし、同じ月、ガダル党の革命家であったシク出身のバーイー・サントーク・シンによってパンジャビー語の月刊誌『キルティール』（＝労働者）がアムリットサルで発行されはじめた。⁶⁹⁾

この『キルティール』の流れと青年インド会議の流れは、やがて1928年に一つに結ばれた。ラーイーの周辺には新しい動きが始まっていたのである。（続）

〔付記〕 本稿は、同じ標題のもとに『大阪外国語大学学報』37号、1976年に記した拙稿に続くもので、未完である。

(1979, 4, 9)

69) Sohan Singh Josh, *My Meetings with Bhagat Singh and on Other Early Revolutionaries*, New Delhi, 1976, p. 11.